

## 桐朋小学校 田んぼ観察会

2008年6月13日(金)



学校の教科書にもとづいた授業では水田を工業や商業にならぶ「産業」のひとつとして扱いがちだ。今回、都内の閑静な住宅地に位置する私立小学校の先生から「自由な田んぼの学習」をしたいという依頼を受けて、林鷹央氏と二人で小学校の学校田んぼへ向かった。面積にして7、8畳の田んぼだが、水を張ればトンボやカメムシ、うまくすればカエル、周囲の生きものが集まってくる。千葉から持参した、藻類やミジンコ、イトミミズの入った土、「命の土」を放流した。



●日時

2008年6月13日(金) 第1回 AM10:45～ 第2回 AM11:30～

1クラスずつ、2回開催

●場所

桐朋小学校

東京都調布市

●参加者

5年生2クラス72名

●インストラクター

林鷹央、原覚俊

●内容

ポケット図鑑配布

お話①なぜ田んぼや生きものは大事なんだろう？(原)5分

お話②田んぼで見つかる生きもの(林)5分

田んぼのガス抜きをしながら、金魚網で生きもの採取

田んぼの土採取、(各班代表1名)10分

土を洗って観察(全員)、子どもはノートに見つかった生きものの

名前を書く、林・原は生きもの名前を教える 15分

見つかった生きもの発表、まとめ(林)10分

●使用した道具・資料

ポケット図鑑 80

金魚網 10

ミニ水槽 10

バット 30

イトミミズ水槽



### ●感想

BASC 事務局 原覚俊：

「なぜ田んぼや、そこにすむ生きものは大事なんだろう」と、子どもたちへ質問をなげかけてから、土のなかの生きものを実際に観察を行いました。担任の先生も、大人もいっしょになって考える自由な田んぼ観察をめざしました。子どもたちは泥んこになりながら生き活きと（大興奮？）、グループで考えた意見を発表していました。「田んぼがなくなったらきっと食べものがなくなります」「生きものがない世界だと、悪い虫しかいなくなると思います」。だれが教えたのか「CO2のために田んぼが役立つと思います」などと発表する子どもも…。

授業の締めくくりには、子どもたちの代表が、生物多様性農業を実践する「ちば緑耕舎」（千葉県）の土を学校の田んぼへ放流しました。この土は農家の協力を得て持参したもののだが、このにはイトミミズの卵、藻類、菌類など、命の源がたくさん詰まっています。たくさんの拍手のなか、命の源をふやす願いを込めて土がまかれました。

多感な時期の子どもの教育に日ごろ熱心に取り組む担任の先生は「生きものは気持ち悪い、田んぼなんか汚い、テレビゲームのほうがいいと言っていた子が多かったのに」と涙ぐんでいました。後日談だが、命の土をまいた後の田んぼには、毎日ルーペと試験管を持って生きものの様子を見にくる子どもが現れたそうです。（原覚俊）

